

「選挙フェス」

17万人を動かした

新しい選挙のかたち

三宅洋平 岡本俊浩



選挙演説中
←

「選挙フェス」17万人を動かした新しい選挙のかたち
三宅洋平 岡本俊浩

星海社

41



選挙に立候補するのはおれがみんなより強いからじゃない。皆より声がかいからじゃない。あなたと変わらないおれが勇気を振り絞っただけなんだ——。



参院選最終日「選挙フェス」で聴衆に語りかける三宅洋平。



選挙が「祭り」になった

2013年7月20日。参院選最終日の夜8時を回った。

公職選挙法は、街頭での選挙演説をこの時間までと定めている。「緑の党グリーンズジャパン」から、全国比例区に立候補をした三宅洋平もマイクを置いた。

しかし、東京・渋谷ハチ公前広場に組まれた仮設ステージ周辺は、いまだ、20代から30代が中心の若い聴衆で埋め尽くされている。うねりは、おさまる気配を見せない。人はスクランブル交差点をはさんだ対岸にもいるし、一時はハチ公前を一望できる渋谷エクセルホテル東急の窓際にまで押しかけた人もいたという。ツイッターに投稿されたパノラマ写真を見ると、この晩ハチ公前には数千という単位の聴衆が詰めかけたことは間違いないだろう。

筆者の前を、街の灯りに顔を照らされた聴衆が次々と通り過ぎていく。夏の夜、シャツをぐっしりと濡らしたまま歩いていく人も珍しくない。

「これは壮大な社会実験ですよ」

この日、何時間か前に聞いた、緑の党広報・郡山昌也（こわりやまささや）の言葉が頭をよぎった。ついさっきまで、彼らが取り囲んでいたステージからは大音量のリズムが鳴り響いていた。三宅は

アフロ音楽バンド「キングダム☆アフロックス」のリズムに乗ってこう叫んでいる。

右も兄弟、左も姉妹。ブラザーシスター、みんなでかいフ
アミリー。意見の違い、簡単に乗り越える術をいまおれた
ちが学んでいるところ。やってみようぜ。国会って場所で、お
れたちを試してみようよ。ヤーマン。誰がメディアって、みん
ながメディア。みんなが集まっていたら、マスメディアも来たぜ。

聴衆は手を振りかざすような仕草しぐさで応じ、歓声をあげる。

これが国政選挙の街頭演説なのだろうか。目を疑わずにはいられない。

これまで私たちが「風景」として見てきた選挙は、常に閑散かんさんとしていた。仮に選挙カーの周りに人がいたとしても、それは若者の群れではないし、歓声などは聞いたこともなかった。

だが、いま目の前にある光景は違う。ステージの横断幕にはこう書かれている。

「選挙フェス 政治をマツリゴトに」

候補者及び陣営は、自らの選挙をこう呼んでいる。

三宅洋平^{みやけようへい}。1978年生まれのミュージシャンだ。

参院選の公示日までにはまったく無名の人間。ミュージシャンといってもテレビに出ることはほぼないし、大手レコード会社と契約もない。数千人を収容するアリーナ級の会場で公演を行う動員力があるわけでもない。

つまり、無名ミュージシャンで泡沫候補^{ほうまつ}。

だが、この泡沫候補及び陣営は、全国14都道府県の会場にステージやスピーカーを持ちこみ、次々と個人演説会場をライブコンサートの空間に変えていった。その多くは屋外だったから、「野外フェス的」と呼んでも差し支えないだろう。

三宅は多くの会場でギターを抱えて歌い、時にはダンスまでし、演説を行った。有名無名問わず、ラッパーやシンガーソングライター、バンド、DJが「応援」演奏をし、数百〜数千人という単位の聴衆が詰めかけている。

これまでの選挙文化でいえば完全な「奇手^{きしゅ}」だろう。

手法のみならず、候補者の見た目も奇異だった。

襟えりつきのシャツを着ない、髭ひげをそらない。名前が書かれたタスキもかけない三宅は、Tシャツに島ぞうり、キャップの出いで立ち。路上ミュージシャンかやんちゃな輩やからにも見えなくはない。また、選挙カーから名前を連呼しない、駅前で辻立ちつじだちをしないなど、これまでの選挙文化でセオリーとされてきたことの多くを受け入れることがなかった。

様々な争点が乱れ飛んだ参院選で、「反原発」「反TPP」「脱経済至上主義」「脱戦争経済」「持続可能な暮らし」を訴えたが、ここはこれまで左派が訴えてきた争点と同じで、珍しいものではない。

奇手をこらした選挙手法、奇異な見た目。そして、一見は左派の訴えとそう変わることはない政治的主張は、当初、誰もが予想をしなかった拡ひろがりを見せていく。

三宅は街頭の演説で、「これまでの選挙は公示日の前で全部決まっている。それを覆くつがえしてやろうぜ」と訴えた。確かに、国政選挙から地方議会選挙に至るまで、選挙というものはフタを開ける前におおむね決まっている。党勢は？ 票ひょう田ひょうでんとしての支援組織はいかほどか？ 知名度は？ 選挙活動を行う上で資金力はいかほどか？ これらに世論調査を加えてマスコミが弾き出す予測は的確で、その精度はこの年の参院選でも証明されている。

得票数順位	得票数	候補者名	所属	
1	99万6,959票	山本香苗	公明党	当選
10	32万6,541票	佐藤正久	自民党	当選
11	30万6,341票	中山恭子	日本維新の会	当選
13	27万9,952票	橋本聖子	自民党	当選
26	17万6,970票	三宅洋平	緑の党	落選
29	15万6,155票	又市征治	社民党・党幹事長	当選
30	15万3,303票	丸山和也	自民党	当選
34	13万4,325票	小池晃	共産党・党副委員長	当選
38	11万7,389票	川田龍平	みんなの党	当選
40	10万4,176票	渡邊美樹	自民党・ワタミグループ 創業者	当選
45	7万7,173票	太田房江	自民党	当選

出典：朝日新聞 2013年7月23日朝刊

そんななかで、三宅洋平は決して少なくない票を獲得した。

17万6970票。

これは、比例区で立候補した162人のうち26位に相当する。図のような比較をしてみると、メディアで有力、注目とされた候補者と競っていることがわかる。

敗けて、名を上げた

三宅は、落選候補者のなかで最多の得票数を叩き出すも、推薦元・緑の党の得票数が貧弱だったため、落選。周囲は、泡沫候補が見せた予想外の健闘に色めきたった。

「ネット選挙解禁元年」という文脈も、三宅への注目を集める一因となった。ウェブサイト「ヤフーみんなの政治」は、参院選に立候補した候補者をランキングづけしている。

このなかで三宅は、公示期間中にソーシャルメディア「ツイッター」のフォロワーを1万2000人から4倍の5万人に増加させ、期間中の増加数は1位。また、ツイッター上で発言が拡散された頻度も1位。ネット上での検索結果では、東京選挙区で当選した山本太郎（現参院議員）に次いで2位になっている。

投票開票後、マスコミ各社は三宅の選挙を報じている。

政治に無関心の人を目覚めさせ、政治を志す人の背中を押す。そんなネットの可能性が示されたのではないか。雲上の世界を地上に手繰り寄せるような効果だ。（東京新聞2013年7月26日朝刊）

三宅さんへの支援の核となったのは、音楽仲間やファンたち若い世代だ。三宅さんは、ネットを活用する一方、ネットから飛びだそうと呼びかけていた。それに応えた若者たちが、一晩かけて親を説得したりして、支持が広がったという。（朝日新聞2013年7月31日朝刊）

三宅の政治的主張は、脱原発だったり反TPPだったり反戦だったりするんだが、なにより、不満があるなら投票行けやという一点に賛同したミュージシャンたちが集まった。急遽集まった選挙フェスバンドは、ホーンセクション、ギター、ベース、ドラムズが、それぞれソ口をとって「多声」で主張しつつ、ファンクなうねりでまとまる（中略）これ以上、音楽の生まれた理由をつかんだ直観を知らない。これ以上、民主主義の本質をえぐった定義を知らない。プロの政治屋なんかよりも、ずっと。ピース。（近藤康太郎「ギリギリ限界！」アエラ2013年8月5日号）

敗けて有名になる候補者はそうそういないが、三宅洋平はそのひとりとなったのだ。

演説終了から30分以上が経ってステージに近づいた。

三宅はいまだに引かない聴衆の握手に応じていた。ギャルっぽい女子、天然素材のワードローブを来た男子、スケボーやってそうな白人。三宅は選挙前よりもさらに日焼けをし、真つ黒になった顔をくしゃくしゃにして、彼らと言葉を交わしている。

それを眺める筆者のところに、選挙前から三宅洋平のマネージャーになった「マイク」こと菅野翔太（1988年生まれ）がきて、こう言う。

「おれら、このあとホテルに戻りますけど、一緒に来ませんか？」

三宅がステージから降りてくる。なんともいえない表情をしていた。張りつめたものが一切なく、口元にかすかな笑みを浮かべて、「いやあ、終わったね。終わった」などと、ぶつぶつ言いながら歩いてきた。

一緒にハチ公前を離れる。ついさきほどまで、数千という数の聴衆を釘づけにした候補者が渋谷駅前を歩く。次々と人とすれ違いますが、不思議と三宅を見て振り返る人はもういない。

三宅らが宿泊する渋谷エクセルホテル東急に戻ると、同行スタッフが iPhone のカ

メラを回し始めた。

この選挙では、おびただしい数のスマホが三宅洋平を捉え、「ツイキャス」（動画配信サービス）などを経由し、街宣（街頭宣伝）の様子を中継していた。最後の演説を終えたのだから、三宅もゆっくりしたいのではないかと一瞬躊躇したが、これがもう常識なのか、三宅もスタッフも、気にする素振りを見せない。

玄米弁当に手をつけ、三宅は口をもぐもぐと動かしている。頬はこけ、目の下がくぼんでいた。

「痩せたかな？」

「まあ痩せたね。それでも3キロぐらい」

声が、少しだけかすれている。

「三宅さんの選挙がこうなるとは思わなかった」

「俺も思わなかったよ」

「17日間で、いつ手応えをつかんだの」

「初日（7月4日）。吉祥寺で『決まった』と感じたんだ」

つまらないゲームは変えてしまえ

大学時代、三宅は吉祥寺のライブハウス「スターパインズカフェ」でアルバイトをしていた。吉祥寺はいわば「ホーム」。この街を最初の街宣場所に選んだのは、当然の選択であり、その後の選挙活動に勢いをつける狙いもあっただろう。

一方では、こうも感じていたという。

「聴衆が10人、20人でも仕方がないし、この選挙はずっとそうかもしれないと思っていたからさ」

だが、フタを開ければ吉祥寺の商店街「サンロード」入口に集まる聴衆は、演説開始の夕方からふくれあがって終盤の夜7時台には300人を超えていた。聴衆がその様子をスマホ経由でネットに投稿し、話題が拡がっていく。

ネットのマーケティング用語で言うところの「バズ」が起きたのだった。

鍋に張った水が徐々に沸き、やがてぐらぐらと大きな泡を立て始めるような光景は、これまで官邸前かんでいの反原発デモが起きた時の手触りにも似ていた。

では、なぜ無名候補・三宅洋平の選挙がこうなったのか。「政治離れ」という言い方がされて久しい。なぜそうなったのかについては様々な指摘があるし、今後も検証と議論が

必要なのは間違いないとしても、筆者が市井の有権者として感じてきたことの一つに「選挙がつまらない」という点がある。

もちろん、政治への関心を持つ／持たない、政治参加する／しないを「おもしろい、つまらない」の点で決めてよいのかという議論はあるだろう。

ただし、ユーザーにとって充実感を感じることでできないゲームが盛り上がるとはやはり思えない。この国で民主主義が続く限り、選挙が終わることはないだろう。その選挙を苦過ぎる良薬のままにしておくのは、随分損なことではないだろうか。

ならば、つまらないゲームをどうやったら面白くできるのか。本書はその回答の一例として、三宅の選挙フェスを挙げる。奇手に満ちたあの選挙で、社会に還元できるものがあるのか否か。そもそも、あの選挙を走り抜けた三宅洋平という奇異な男は何者なのか、本人への聞き書きをもとに詳述している。本書の構造は、筆者によるルポと三宅本人の独白が交互に入れ替わっていく構成をとった。

なお、本書に登場する人物、取材対象者はすべて文中敬称略。所属はすべて取材時のものとした。



参院選公示日。吉祥寺の路上でギターを抱え、演説を行う三宅。足元は裸足。

目次

第1章 モノローグ 三宅洋平 「おれは決して立派な人間じゃない」

帰国子女。田舎で悪目立ち 24

嵐の山で決めた。音楽で生きていこう 32

軍隊組織のブラック労働 41

20代、まるでうまくいかなかった 50

発言するのにポジションは関係ない 59

第2章

渋谷に現れた、居場所なき男

第3章 モノローグ 三宅洋平 「参院選立候補は、 敢えて茨の道を選んだ」

くどいほど理想を歌う 68

もう、政治力があるんだ 72

文化の縁でつながって、立ち上がれ 77

立候補の前にある壁は何か 81

音楽と政治は似ている 86

2012年、幻の立候補 92

選挙資金を確保せよ 102

現実と理想、どちらをとるか 105

迷ったら、原点に戻る 109

夜はたった一人のダンサーから始まる

第4章

エコロジカルでオルタナティブな支持層

組織がない、組織 122

音楽業界のプロが支えた街頭演説 127

政治的に口下手な支持層 131

ご神体さまだ 136

エコロジカルでオルタナティブな文化に対する忌避、嫌悪 143

野外フェスが世代間をつないできた 146

第5章

モノログ 三宅洋平

「IQだけ高いバカにはなるな」

ぶつかって、わかりあう 152

渋谷の選挙フェスは帰らなかった 158

理性と再魔術

競争が起きた 163

自分の暮らしは具体的に喋った 174

喧嘩腰にならないこと。冷静に、学びの姿勢で 181

ネット選挙、光と影 190

マーケティングとしてのネット選挙 194

選挙は「タマ」。傑出していた三宅の資質 196

政策の時代が終わる、のか 201

車の両輪としての、理性と再魔術 211

第7章

モノローグ 三宅洋平

誰もギロチンにかけない革命

憲法9条をラップした 218

我、ただ足るを知る 227

候補者の暮らしも守れる選挙が要る 234

仲間を頼れ 238

人間、理屈だけじゃない。なら、どうするか 243

第8章

これでいい、こんな候補者がいたっていい

びびりながら向き合っていた 252

やせ細った血流を拡げるために、できること 257

おわりに 265

第1章 モノローグ 三宅洋平

おれは決して立派な人間じゃない

i'm not such a man.

帰国子女。田舎で悪目立ち

参院選のことを振り返る前に、おれという人間がどういいう人生を送ってきたのか。みんなに知っておいて欲しい。

生まれはベルギー。帰国子女なんだ。ブリュッセルという街で生まれたよ。

上に姉ちゃんがひとり。父親は日本の大きな製薬会社で働いていた。ベルギーに大きな工場を建てていうんで、その環境整備をするために赴任していた。会社のエース？ まあ、会社にとっては重要な仕事なんだろうし、たぶんそうだったのかなあ。

母親は専業主婦。岡山の短大で音楽科を出ていて、ピアノ教師をやっていた。おれがミュージシャンになったのは母親の影響と言いたいところだけど、まあ、うよ紆余曲折きよくせつがある。そこはまた後で話すよ。

暮らしていたのはブリュッセル郊外のルーバンという街。

日本人はおろか、アジア人も少ない街だったから、おれは近所の人から珍しがられたし、かわいいがられた。「向こう三軒両隣」って言い方があるでしょう。ルーバンでは向こう三軒どころじゃなくて、通りの一区画がご近所。かわいがられるもんだから、近所の人の家に遊びに行ってお菓子をもらったり、友だちと遊んだりしていた。

家では日本語で会話をしている、外に出るとフラマン語（ベルギーの公用語）を喋っていた。

覚えているのは、通りで演奏していたギター弾き。その日、街で何かのデモをやっていて、待ち時間に参加者が退屈しないように、ボラントイアの女の人がガットギター（クラシックギター）を弾いているのを見たんだ。ギターとの初めての出会いで、そのとき、まじまじとギターを

見つめるおれの写真が残っている。

ベルギーではカソリックの小学校に少しだけ通ったけど、7歳の時に親父の仕事で山梨に帰ってくることになる。

甲府市の隣にある敷島町だった。当時は畑しかない田舎町で、近所には、くみ取り式便所の農家が何軒か残っていた。

そんな町で、親父は新居を建てるんだ。畑のド真ん中に白い一戸建て。母親は趣味がガーデニングだから、庭は百花繚乱。おれは嫌いやなかつたけど、どう考えても目立つよね。悪目立ちといつてもいい。学校ではそれをネタにいじめられたよ。

「日本にいるな。ベルギーに帰れ！」

きつかったなあ。おれ1人対クラスメイト10人でケンカになったりすることもあった。

おれも悪かったんだ。それまでずっとベルギー育ちだったから、日本の文化とか同世代のノリとかがわからない。みんなが『少年ジャンプ』を読んでいたら、

「それ何？」

とか空気の読めないことを言う。ウザいでしょ。クラスメイトが地元ネタで盛り上がっていたら、

「ベルギーではさー」

なんて横槍よこやりも入れる。

たぶんね、「おれはお前らとは違うんだ」って意識があつたんだよ。それじゃ友だちなんてできない。で、いじめられて泣きながら家に帰ると、母ちゃんはこう言うんだ。

「悔しいと思わんのか！ やり返してこい！」

親父は何も言わなかったなあ。仕事で忙しくしていたから、接する機会が少なかったよ。怒られた記憶もあまりなくて、仮に怒られる時は「母ちゃんの言うことを聞かなかつただろ」とか、そんな感じだった。

教育ママだった？ うん、ただ、「ママ」と呼べるほどかわいいもんじゃなくてさ、「教育の鬼」。

ベルギーで暮らしている時からそう。小学校に入る前から必修科目をやらされて、

「あんたは外国暮らしで、日本の子より遅れとる。だから人一倍やらんとついていけない」

とか言われて、ひいひい言いながら勉強していた。

そんな母ちゃんだから、おれのいじめがひどくなった時は、学校は

もちろん相手の家にも怒鳴り込むんだよね。河川敷かせんじきで体操服袋を燃やされた時は、問いつめて相手の親を泣かせていた。

山梨時代は仲のいい友だちもいた。ただ、基本的には地元の輪になじめなかつたね。遊びの約束をしようといろんな子を訪ね歩くんだけど、常にたらい回し。

小学4年からはピアノ。ピアノ教師だった母ちゃんが、大枚をはたいてプロのコンサートピアニストの教室に通わせたんだ。毎日、課題曲ばかりで退屈だったけど、ベートーベンは好きだったから、それだけは楽しく弾いていた。教室が終わったら、自宅でも練習。母ちゃんにもものさしで叩かれながら弾かされたよ。

超スパルタ家庭教育。なんでそうだったのかはわからないけど、よく母ちゃんは短大出の自分の轍わづを踏むな——みたいなことを言ってた

んだよなあ。

よく家で小説の音読もさせられていたんだ。文章の流れを理解して声に強弱をつけて、句読点の位置を意識し、リズムよく喋る。これは歌に生きたと思うし、なんだかんだ母ちゃんには感謝している。

小学校高学年になってサッカーを始めた。親に反対されて、部には入れなかったものの、町の小学校対抗戦で、おれはチームの副主将をやっていたんだ。ポジションはキーパー。朝練に出て、できない子の練習を手伝ったりしていると、少しだけ周りの目が変わったのを感じた。

その頃から潮目しほめが変わるんだ。でかかったのは、父親が外資の製薬会社に転職し、山梨から山形県に引っ越したこと。

中学1年からは、私立の日大山形中学に通った。結局、山梨では地

元の壁に阻まれてなじめなかったけれど、新しい学校に来ているのは県下の坊ちゃん、嬢ちゃん。転勤組も多くてさ、帰国子女を引きずっているおれには居心地がよかった。楽になったんだ。

母ちゃんのスパルタぶりは相変わらずで、「東京の難関私立高に行かなければならない」ってシナリオをおれの前に広げて、家庭教師をつけるわ、模試のときには東京のZ会ゼット（進学塾）にも行った。ひいひい言っ
て勉強していたから、そりゃあ成績は上がったよ。Z会の全国模試で
国語は全国2位になったりした。

高校は早稲田学院に受かって進学。サッカーの古豪だったし、これは絶対行きたいぞと考えていたから、達成感があったね。東京の学校だったから上京もできた。すでに姉ちゃんは早稲田大学に通っていて、この頃は父親も東京にいた。山形からおれと母親が出て行って、東京・

練馬ねりまでの新生活が始まる。

ここまでのおれの人生は、まさに優等生。教育的観点から見ると、順風満帆じゆんぷうまんぱんだったと思う。

嵐の山で決めた。音楽で生きていこう

高2の時に両親はおれにギターを買い与えた。これは失敗だったね。アコースティックギターだったけど、勉強漬けの反動で、ロックに傾倒たうしていくには十分すぎたよ。エスカレーター式で早稲田大学にも進学できるから、勉強はしなくなったなあ。高校時代はギターとサッカー。この2つにほぼどつぷり。ははは、ボブ・マーリーみたいでしょ。時間ができたからサブカルチャーにも足をつっこんだ。

早稲田学院の図書館が有名なのは知っているかな。全国の高校では

屈指の蔵書数があつて、レーザーディスクが見放題の視聴覚室まである。全部タダ。部活が休みだったり、ケガで練習に出られないときは図書館にこもつていた。

中学の頃は吉川英治全集とか日本の戦国武将の伝記漬けたのが、今度はニューエイジ関連の本にどっぷり。レーザーディスクでジミ・ヘンドリックスのライブを観て腰を抜かしたり、映画は黒澤明くろさわあきら。『イージー・ライダー』とか、アメリカンニューシネマもよく観た。

受験勉強であたふたしてなかつたから、高校3年の頃はイギリス留学もした。

なるべく日本人のいない語学学校を希望したんだけど、やっぱり何人かいた。でも、おれは「英語を喋りにきたんだから、絶対に日本人とは話さないぞ」っていう自分ルールをつくつていた。留学生の日本

人女子がかたまつて、「うちのクラスのメキシコ人がさー」と盛り上がってるのを横目で見て、「日本のムラ社会、ダセえ」とかつぶやいたりして。

イギリス留学ではアルゼンチン人のガールフレンドができたよ。彼女と話していて、おれはいろんなことを知ったんだ。まず、反米感情がハンパじゃなくて、それが驚きだった。おれは学校の図書館でアメリカのサブカルチャーにどっぷりだったし、

「アメリカのこと、こんなに口汚く罵るののし人がいるんだ」

って。音楽の話もしたんだけど、これで大恥をかいたよ。反米の女の子に、おれは「ガンズ(アンド・ローゼス)が好きなんだよね」と言ってしまった。返ってきたリアクションが、

「ダッセー、ガンズなんか聴いているの。まじであり得ないんだけど」

だった。

その代わりに、ガールフレンドに聴かせてもらった南米音楽はどれも初めて聴くものばかりで、ショックを受けた。おれの知らない音楽がこんなにかくさん……その頃に聴いた音楽は、大学時代になって始めるバンドで強い影響源になった。

そして、彼女と別れるときにもらったコイン型ペンダントには、チエ・ゲバラの顔が刻印されていた。そのときは、誰かよくわからなかったんだけど、世界には、アメリカを「ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカ」と呼び、南米こそ「本当のアメリカ」なんだという人たちがいる。そういう現実があることを、コインを見る度たびに思い出したよね。

早稲田大学に入ってからにはビート文学にも目覚めた。メルヴィルの

『白鯨』^{はくげい}に、ジャック・ケルアツクの『オン・ザ・ロード』を読んで、気分はビートニク。オリジナル世代に比べると随分遅いけどね、おれってそういうやつなんだろうなあ。

バンドは大学に入った頃からやっていた。学内には、おれと同じようにエスカレーターで進学してきた連中がいて、要はみんな時間がありあまっていた。そんなに受験勉強してないから。

で、やたらと楽器がうまいやつがいるなと思って、そいつらと中庭でジャム(即興のセッション)つたりしていた。……モテたよ。覚えているのはロシア文学科の年上の女の子かな。いきなり「お持ち帰り」されたんだよなあ。

話を元に戻そう。おれが19歳の頃、1998年に結成したバンド「犬式」^{しき}は、そのときにジャムっていたメンバーでやることになるんだ。

なんで「犬式」って名前にしたかって？

これは、おれが人間よりも犬の方がまじだと思っていて、もう人間なんか滅びたって構わないと思っていて、そうつけたんだ。いま考えるとすごい理由だなあと思うけど。

実はその頃のおれは迷っていた。サッカーも続けていてバンドもやっていたんだけど、要はどっちに本腰を入れるかってことだよ。そんな時に、いまのミュージシャン人生を決定づけることが起きるんだ。1997年の夏、野外フェスの「フジロック（フェスティバル）」に出かけたんだ。そう、あの伝説の第1回で、会場は山梨県の富士天神山スキー場。初日から台風が直撃して会場は暴風雨。2日目が中止になった。これは、いまも自分のライブでストーリーリー仕立てで話すからファンは知っていると思うけど、改めて話すよ。

あの頃は、いまみたいにゴアテックスのジャケットを着ている人なんて少なくて、Tシャツにデニム、下はスニーカーで来ている人もザラ。低体温症で死ぬ人が出るんじゃないかと心配になるぐらい、暴風雨で濡れたまま震える人が続出していた。大勢の帰る人で狭い退場ゲートが大混乱にもなっていた。

他方、おれもズブ濡れになりながら、少しでも身体を暖めたくて懐ふとろに隠し持ったマイヤーズのラムを呷あおっていた。寒さで震えている人に飲ませたりもしながらね。その時、高見たかみの見物をする人を見た。屋内から、熱々のコーヒーを飲みながら「大変だねえ」とかニヤけた表情をしている。たぶん、音楽業界か報道関係の人だったのかなあ。カメラとか持っていたし。おれはそれを見て怒りはじめたんだ。「ふざけんなてめーら！ 出てきて困った人を助けるよ！」

叫んだところで多勢に無勢。酔っていた。それでなぜかおれは、友だちと一緒に天神山の勾配こうばいを登り始める。酔いの勢いに任せて半分ぐらい登るも、息が切れた。「寒い、疲れた。もうダメだ」とあきらめ途方ほうに暮れた瞬間、おれたちの前に何かを煮炊きしているテントが見えたんだ。

「あつたかそうだなあ。おい、あつちに行ってみようぜ！」

息を切らしてテントに行くと、そこにいたのは4人組の白人。一際ひときわシブい、いい感じのおっさんがいて、彼は「ジョーだ、よろしくな」と名乗った。

おれはイギリス留学で培った英語で話しかけたよ。テントのなかにギターがあつて、一つしかできないブルースのコードを繰り返して弾いたりしてあたたかい飲み物をもらったりした。明らかにお世辞せじだった

はずなんだけど、ジョーは「なかなかいいぞ」とか言ってくれて、おれは気が大きくなつてその場でセツシオンを申し出た。ますます調子に乗つて、「あんたもなかなかやるじゃん」とか偉そうなことを言つたりしていた。

帰り際にジョーはこう言つた。

「お前のような少年に出会えて、日本がロックしているってよくわかつた」

東京に戻つて、ゼミのレポートを書かなきゃならなかつた。テーマがジム・ジャームツシュの映画だったから、レンタルビデオ屋に走つた。借りたのは『ミステリー・トレイン』。

観て驚いたよ。映画に天神山で会つたジョーが役者として出てるじゃないか。

どこからどう見てもジョー。エンドロールを観たら、ジョーは、ザ・クラッシュの「ジョー・ストラマー」(2002年死去)だつてことがわかつたんだよ。震えた。伝説のパンクバンドのボーカル&ギターと、おれはセッションしていたんだ。あの天神山で。

興奮したまま、その一件をレポートに書き上げた。おれにとっては世紀の大事件。その一件がおれに「バンドをやろう」と決意を固めさせたんだね。

軍隊組織のブラック労働

自分はサブカルチャーの申し子みたいところがある。1990年代に高校、大学時代を過ごした同世代のなかにこういう人間は多かつたんじゃないかな。

話を戻そう。音楽でやっていく決意を固めたおれは、仲間とライブハウスに出るようになった。年上のバンドに混じって演奏して、よくかわいがられた。演奏には自信もあつたし、こりやメジャーデビューできるんじゃないかとも思った。でも、世間知らずだからデビューつてどうやってしたらいいのかわからない。

これは選挙フェスの初日でも喋つたけど、大学2年から吉祥寺のスターパインズカフェでアルバイトを始めた。大勢の仲間ができたし、音楽でつながる夜の文化が——いまもかけがえのない財産になっている。

音楽に夢中になるうち、あつという間に大学3年になっていた。デモテープなどを作ってはみるものの、相変わらずデビューつてどういうステップを踏んだらいいのかわからない。そんなときに、吉祥寺の

「ありがと屋」って呑み屋で、大手レコード会社「ビクター」の社員と友だちになる。

名前はモトヤ。初めはレコード会社の人間とは知らず、年上なのにタメ語で話していた。ライブの日が近づいてくると、「今度観に来いよ」とか、これまたなれなれしく誘っていた。

おれの話法は「タメ語」がベース。ベルギーでもそうだったし、ライブハウスやクラブ、バーのような夜の世界ではそれで通してきた。もちろん、そのせいで軋轢あつれきを起こしたことは数知れない。でも、歳が上だから下だから、えらいとかえらくないとかで、自分が喋る言葉を変えなきゃならないのは面倒くさかった。振り返ってみると「若いなあ」とは思うけど、いまだに妙な謙遜けんそんをされるとイラつとくるときがあるよ。

ライブハウスに誘ったら、モトヤはホントに来た。で、「チケット代の領収証が欲しい」とか言うんだよね。ライブを観に来て、領収証をもらおうやつも珍しいなと首をかしげていたら、こう切り出された。

「ウチ(ピクチャー)からデビュ―しないか?」

モトヤの段取りは、まず社内営業からスタートし、機きが熟じゆくしたところでデビュ―計画を走らせるといふものだった。だから、すぐにデビュ―はできないんだけど、おれらにとっては「待ってました」という話。すぐに乗ったよ。

でも、その一方で、おれのなかでは「何年かサラリーマンをやるのもアリかな」って考えも芽生めえはえていた。働いてばかりで、家庭にいた記憶がない親父を見ていて、

「サラリーマンにはなりたくないな」

とさえ思っていたのに、就職活動を始める。

モトヤと約束はしていたけど、すぐにデビューできない事情もあった。どうしようかと考えているうちに就職活動のシーズンがやってきたというところだね。ダサイとは考えていたものの、何も知らずにサラリーマンを批判するのもどうかとも感じた。経験は必要。それで、「偵察」も兼ねて、就職活動をしたんだ。こう見えて、普通の社会人経験もしているんだよ。

内定は人材派遣の「インテリジェンス」、そして「リクルート」からもらった。おれはクリエイティブ系の仕事がしたかったから、それをやらせてくれるっていうリクルートに決めた。面接は15回くらい。同期は6回前後だったのに、何でそんなに多かったのかというと、何人もの面接官が「合格」じゃなくて、「判断不可」のハンコを押していっ

たから。威勢はいい。でも、どこか得体が知れない。そんなやつを採る責任を、誰も負いたがらなかつたんだらうね。

めでたくリクルートに入社。

入社1日前の通達で不動産情報誌の営業に回された。リクルートのなかでも軍隊ノリの部署で、不動産デベロッパ(住宅などの建売業者)を回つて、物件を誌面に掲載する代わりに広告料をもらう仕事。ふざけんなと思つたけど、そんなのあとの祭り。

バンドを続けていたから、入社式にはモヒカンで行つたよ。

人事の人に「バンドは続けます。だからモヒカンで行きますけど、いいですか？」って言うておいたから、おれは好奇の目線を感じながらも、特に心配はしてなかつた。

でも、そのあとに事件が起きる。

居酒屋でやった新入社員歓迎会の席。おれのところに30代の男性課長がやってきて、こう言ったんだ。

「明日から立派な営業マンになってもらうために、断髪します」
あろうことか、課長は居酒屋の厨房に「一番大きな包丁をお願いします」と言って、魚切り包丁を持ってきた。そして、おれのモヒカンをつかんで根っこから刈り取った。同期から先輩、全員が見ているその前で坊主にさせられたんだ。

会社なんてそんなもんかもしれないし、モヒカンで入社式に出るなんて、そりゃ周りにはびっくりする。それでも、部署の希望は通らず、みんなの前で頭を刈られたのはショックだった。頭に血がのぼって、拳の血管が浮き出るほどだった。殴ってやろうか。でも、我慢をした。それから坊主頭で営業。

不動産情報誌の営業は、超のつく過重労働だった。いまで言う「ブルック」ってことになるのかな。朝は9時出社で、午後から自分の担当エリアを回ってデベロッパーさんに営業をかける。夜帰ってきたらデスクワークで、これが深夜12時を過ぎることもザラ。1日15時間から16時間働く時もあった。

仕事が終わったら、バンドのリハーサルでスタジオに入ったりしていたから、不眠で働く日もあったよ。

初めは夢中で働いた。担当エリアに東京・練馬区があったんだけど、学生の頃から界隈かいわいで遊んでいたし、土地勘があったんだ。だから、デベロッパーのおっさんの話がすぐに飲みこめた。

入社後3カ月の段階で、個人営業成績は目標の127%を達成。部署でトップをとった。残業時間もハンパじゃなかったから、月収40万

円は稼いでいた。

でも、会社は9カ月で辞めた。入社後2カ月の段階で辞めることを決めるんだ。モヒカンを刈られたことに続いて、またもや居酒屋で事件が起きたのが発端^{ほったん}。

何人かの先輩社員と同期で一席囲んでいた。輪がばらけて、おれはある先輩社員とサシになったんだ。40代の先輩で元ラグーマン。

「三宅、お前はこれからどうしていききたいんだ」

聞かれたから、こう答えたよ。

「はい、バンド活動と二足の草鞋^{わらじ}になります。どっちも頑張ってくださいます！」

軍隊式のコミュニケーションを叩きこまれていたから、それっぽく答えた。そしたら、いきなりでかい拳が飛んできて、顎^{あご}を1発殴ら

れた。

「お前は、うちの会社を舐めてんのか！」

と言われて、もう1発もらった。

会社で浮いてはいたと思うよ。でも、モヒカンはやめたし、営業も頑張った結果を出していた。それなのにいきなり、逆らえない上下関係にのっとった暴力。意味がわからない。先輩としては「拳で教育」って感じだったのかもしれないけど、そこで気持ち「折れた」。さて、いつ辞めようか。モトヤの話を予定より早く進めることにした。

20代、まるでうまくいかなかった

それから7カ月後、23歳で無職になった。あんなに稼いでいたのに、お金はあつという間に底をついた。バンドってお金がかかる。犬式は

自分がリーダーだったし、ほかのメンバーが困ったらお金は貸したし、奢おごったりもよくしていた。あと、ストレスかなあ。パチンコにハマって、カード会社に借金をつくってみたりさ。

ホントにロクでもなかったけど、その年にビクターからのメジャーデビューが決まった。

犬式でマキシシングルも出したよ。デビューのちよつと前からアーティスト育成金で1人あたり月20万円もらえるようになったから、それはとても助かった。音楽に集中できたし、翌年には大きなチャンスもめぐってきたんだ。

2003年、憧れの「フジロック」出演。

ルーキーステージにビクターの新人バンドとして出演することになった。サンボマスター、アジアンカンフージェネレーションに混じっ

て、犬式は出た。持ち時間は30分。でも、おれらはその日期するものがあって90分間も演奏しちゃったの。

当然、後ろの進行は押しまくるし、大問題。

まず、音響ブースで異変が起きた。

この日、おれらは専任のPA（音響担当）を連れてきていた。彼は当時19歳。犬式の演奏はどんどん延びていくんだけど、最後の方はスタッフが音響ブースに押しかけて、四方八方から、

「音を下げろ！」

と言われ続けていた。演奏終了後、PAは楽屋がくやに戻ってきて、半泣きの顔でこう訴えたよ。

「音下げろ、音下げろって……何度も言われて……でも、音を下げるのは、おれの仕事じゃないんで……！」

それを聞いて、おれは「よくやった！」と叫んだ。

しかし、ステージ裏はそれどころじゃなかった。運営会社のスタッフがおれらの所属レコード会社のビクターにつめよっていた。ビクターのスタッフから、

「楽器を持って逃げて、とにかく遠くへ行ってください！」

と言われ、そうした。と言いつつ、別のステージで踊っていたんだけど。だから、あとの現場は見えていないんだ。後日スタッフから「人生でこんなに謝ったのは初めて」と言われたことと、主催者の日高ひだかさん（スマッシュ代表取締役）が、

「別に自分が呼んだ覚えはない」

と言っていたと聞いて、カチンときたのは覚えているな。

とはいえ、迷惑をかけたよ。

なんで90分間もやっちゃったのか。理由はある。まず、最初はお客が100人しかいなかったのが、曲を重ねるごとにどんどん増えているって、間違いなく数千人という単位になっていた。盛り上がっているんだもん、やめられるわけがないでしょ。

2001年のニール・ヤング、2002年に出たジョージ・クリントンだって、オーディエンスが盛り上がっている限り演奏はやめなかった。フジロックで観たライブがそうだったから、そうして構わないもんだと思っていた。

もう一つは、おれたちをデビューさせてくれたモトヤが、2カ月前に台風の海でサーフィンをしているときに亡くなってしまったんだ。

彼にとって、犬式はビクターでA&R（アーティスト&レパートリー。いわゆるディレクター）責任者として任された初バンド。フジロックも彼が動いて実現し

たことだった。また、この前の年に、ジョー（ストラマー）が亡くなっていた。彼と出会ったのも、まさにこのフジロックだったからね。万感の思いで立つステージで感極かんきわまっちゃってさ、タガが外れたんだ。

いろんな人に迷惑をかけたけど、この年のフジロックは、おれにとっていまだにベストステージの一つ。でも、代償は大きかった。そのときのゴタゴタがきっかけになり、犬式はビクターから契約解除される。たった1年でメジャーをクビになったんだ。

23歳でインディーズのミュージシャンに戻った。

それでも若かったし、音楽業界を見返してやりたい気持ちもあったから、クビになって10カ月間はバンドのマネージメントはしやにむにやっただ。

都内から地方をふくめて、年間100本近いライブのスケジュール

調整をやる。そのとき感じたのは、おれってホントに安請け合いをしちゃうってこと。犬式は4人バンドなのに、バンドまるまるギヤラ7万円＋交通費で遠方のライブもブッキングしていた。

その後、2004年に転機を迎える。映画『バッファロー'66』を当たった配給会社「キネテイク」が社内レーベルの「プロビンチアレコーズ」を立ち上げたんだ。そこが手を挙げてくれて、犬式のファーストアルバム(2005年)を出した。セールスは1年かけて1万枚。インデイズのバンドとして誇っていい数字だと思う。

キネテイクには世話になった。でも、ある行き違いから袂たもとをわかつことになり、2006年には大手CD量販店「タワーレコード」のレコードレーベル「NMNL」と契約。ファンは確実に増えていたし、ついにセカンドアルバムを出すことにもなった。

レコーディングは完了。音源のマスタリングも済んだ。アーティストワークもできて、CDの受注もまさに始めようとしていた。後日、担当者に聞いたところによると、初回で3万枚はいけるんじゃないかって話だった。

そんな矢先の2007年、バンドのドラマーが大麻取締法違反で逮捕されたんだ。

当然、残されたメンバーで集まって話し合ったよ。2枚目のアルバムは発売中止になるだろう。バンドを続けるか否かのところまで話し合っているときに、奥さんが口をはさんできた。この頃は奥さんがいたんだ。26歳の時に結婚して、当時1歳の娘がいたよ。

あのときみんなが何を話したのか、おれが何を言ったのか。ごめん、おれにも話したくないことはあるんだ。だから、かいつまんで話して

もいいかな。

ともかくおれは、奥さんの一言に激高げきこうした。メンバーそっちのけで夫婦喧嘩。奥さんは娘を連れて、それきり帰ってこなかった。離婚したよ。その前から関係はギクシャクしていて、喧嘩はきっかけだったに過ぎないけどね。

それでも、犬式はしばらく続けた。2008年、サードアルバムを出す。これで集大成、出しきったと感じられたから、2009年1月に解散をしたんだ。ちょうど30歳になっていた。

ここまでは、おれの人生はずっとこうだったんだ。いい感じになってきたと思ったら、なんかうまくいかない。

ベルギーから日本に帰ってきたと思ったら「帰れ」と言われる。就職し、結果を出しても殴られる。メジャーデビューをしたと思ったら、

「フジロック事件」で解雇。出戻ったインディでは離婚とバンドの解散。おれに落ち度がなかったなんて言わないよ。社会常識に欠けていた面はあったし、やんちゃもした。人を傷つけたこともある。でも、なんでいつもこうなんだろうと、ずっとこの先もこうなんだろうかと考えずにはいられなかった。

おれは強い人間でもないし、ましてや立派な人間でもない。そんなおれが政治の世界に触れるのは、この後の話なんだ。

発言するのにはポジションは関係ない

ライブで社会や政治のことを喋るのは、大学時代からやっていたし、9・11が起きて、イラク戦争が始まると、

「あんなもん、アメリカと軍需産業の茶番だ。みんな目を覚ませ」

などと言っていた。喋るのはだいたい曲間。「曲よりも長いんじゃないか」とか、よくつつこまれていた。初めは、メンバーもいい顔をしなかつた。

「洋平、演奏は楽しくやった方がいいじゃないか。音楽だけに専念しようよ」

それはおれもわかる。でも、出てきちゃうんだよ。政治や社会に対する疑問、怒り。普段から、そういうものがぐつつ煮えたぎってきて、勝手に出てくるんだ。

社会になじめないから反抗をしていた？ うん、そう言われてもしようがないというか、若い頃は特に日本的なムラ社会を嫌悪していたからね。おれが正しい、お前らが間違っている——って感じかな。

でもさ、数々の偉大なロックミュージシャンがそうだったように、

演奏を通じて個人の政治的価値観、あるべき社会の理想像を訴えることはちつともおかしいことじゃないと思うし、その時々で勉強不足だった面はあるにせよ、自分にとっては自然なことだと感じていた。

2009年にバンドは解散。ソロで音楽をやつていくことになった。独りで身軽になった分、少ないお客さんでも地方をライブで回れるようになって、地方都市のローカルフェスにもよく出たんだ。そういう場所では、環境や社会貢献の分野で活動している人たちがいて、つながりができた。

野外フェスでゴミの分別を徹底してきたNGO「A SEED JAPAN」の羽仁^は仁^にカンタさん、ヘンプ（麻）素材の洋服を「リネーチャー」というブランドでつくっていた井野^い口^のくんもそう。後に、自分のバンド「（仮）ALBATROSS」のドラマーになるPeace^ピーK^ケと演奏す

ることとも多くなって、そのつながりで神奈川県・葉山^{はやま}で暮らしている音楽好きとも交流が生まれる。土地柄、サーフィンをやったり環境意識の高い人が多くて、新しい刺激を受けたな。

それからは、団体や仲間内が主催する集まりや活動にも顔を出すようになってくる。断る理由がないもん。そりゃ行くよ。高尾山^{たかおさん}のドテツ腹に穴を開けるトンネル建設反対運動はその一つだし、山口県・上関原^{かみのせき}発に対する建設反対運動もそう。大体は、音楽の現場がきっかけになっている。

ナマの選挙にコミットしたのも、ひとりで音楽をやるようになってからだね。

きっかけは2010年の参院選。沖縄出身の大ミュージシャン喜納^{きな}昌吉^{しやうきち}さん（1948年生まれ）が、民主党の公認候補として全国比例区に出る

ことになったんだ。喜納さんにとって2期目をかけた選挙。

ある日、おれのところに喜納さんのライブでバックダンサーをしていた岡田哲扶さん（1967年生まれ）から電話がかかってきた。

街頭演説でライブをして欲しいっていうんだ。

以前、喜納さんのライブに出たことがあって、それが縁になった。誘われて喜納さんのライブも観に行つたよ。そのときも「花」を歌っていて、圧倒された。

議員としてはどこまでやるかはわからないけど、おれが関心を寄せていたアメリカ基地問題に明るいことがわかつたし、地球環境にも危機感を持っていて保護活動にも力を入れていた。そして、あれだけ仲が悪かつた、鳩山由紀夫、菅直人と、小沢一郎の間をつないで民主党「トロイカ体制」（2007）発足の立役者にもなつていた。

応援を依頼されたとき、おれは民主党なんかどうでもよかった。前の年に政権交代をしてから世の中は沸き返ったけど、結局決定的な変化は起こせず、ずるずると後退していた。だから、自分のブログやライブで「民主党も自民党もみんなグルだ」だなんて書いていたんだ。でも、この人なら応援しよう。喜納さんなら、と決めたんだ。

おれが演奏したのは、渋谷のハチ公前。自分の選挙とまったく同じ場所。

ギター一本で弾き語りをやった。この直前まで、上関原発の建設反対運動で祝島いわいしまに行っていて、そこで「祝島帰り」という曲を書いた。ハチ公前で歌ったよ。

選挙の街宣で歌うのは難しいって思ったなあ。ライブに来るお客さんとは全く違う。喜納さんのファンもいたけれど、偶然通りかかる人

もいるし、音楽には興味のない人もいる。演奏するだけじゃなくて、政治的なオピニオンも求められる。路上ライブとはわけが違って、目もくれずに立ち去っていく人も大勢いる。「世間」そのものを相手にする感触。そうか、候補者ってこんなに孤独なんだとも思った。

喜納さんの選挙に携たずさわってもう一つ勉強になったのは、「ここまで言うってもいいんだ」ってこと。

喜納さんが使った「脱戦争経済」というフレーズはいまだに鮮烈に記憶に残っているけれど、在日米軍の基地のこと、核の問題、環境に負荷をかけない文明のあり方まで——街頭で訴えることはことごとくタブーに触れることばかり。このおれでさえ、「こんな調子で議員活動をやっている、危なくないのか」って思うほどだったけれど、それでも演奏は力強くて優しかったんだ。

原発、アメリカとの関係、グローバル経済、遺伝子組み換え作物。おれはライブやブログでそれらに反対を表明してきた。時には手厳しい批判も浴びたし、周りから諭さとされることもあったよ。反原発を訴え始めてからは、たまにあつたCMの歌入れ仕事もパタリとなくなった。でも、自分のポジションと天秤てんびんにかけて発言をやめる、そんなことはしなくていいんだ。責任をもって発言して、間違っていたら訂正する。わからないことがあれば聞けばいいじゃん。喜納さんの選挙を見ていて、そう思ったんだよ。命をとられるかどうかまでは、大袈裟おおげさかもしれない。でも、仮にそうなったとしても、「正しい」と判断して言ったことでそうなったなら、しょうがないじゃんって。

この年、喜納さんは落選。2期目はならなかった。それでもこの年の選挙応援は、自分のなかに小さくない変化を起こしたんだ。

第2章

渋谷に現れた、
居場所なき男

くどいほど理想を歌う

筆者が初めて三宅と会ったのは、2012年4月のことである。

この年の春、三宅は自らがフロントマン（顔役）を務める5人組のバンド「(仮) A L B A T R U S」で初アルバムを出すことになっていて、筆者は発売元のレコードレーベル関係者から、「これでもかかっていうほど、世の中のことを歌うやつがいる。こういう人、好きでしょ」と音源を渡されていた。

確かに、ブルースやレゲエ音楽が混ぜこぜになった演奏をバックに歌われる詞には、「地球環境との共生」や「人間らしく（自由に）生きる」といったテーマがある。一方、リスターに対して——くどいほどの社会参加の煽りあおがある。

どこか、相反する二面性が同居しているようにも思えた。

どんな人間がこんな音楽を作るのか。三宅に取材を申し込んだのは、初めは単なる興味本位だった。インタビューは、雑誌『テレビブロス』の連載コラム欄に載せるつもりでいた。決して長い原稿ではない。取材場所は、三宅の宿泊していた渋谷のホテル内にある喫茶店さてん。左のテーブルではビジネスマンが眉間みけんに皺しわを寄せて打ち合わせをし、右のテーブルでは若いOL同士が同僚の悪口を言い合っていた。互いの話をまったく聞かず、のべつま

くなしに延々と言い合うのを眺めていると、三宅が現れた。

胸の高さまでかかる長髪に、ヘンプ素材のニットキャップをかぶっている。そして無精髭^{ひげ}。上半身に着こんだフードつきのニットは、カラフルなマルチカラー柄。出で立ちは、野外フェスで、アジア雑貨か極彩色のキャンドルを売っていてもおかしくはない。

そんなフアッションに身を包んだ三宅は、こう言って握手を求めてきた。

「ヤーマン」

三宅の街宣を見た人のなかには、この言葉に覚えがある人もいるだろう。

ヤーマンはレゲエ文化圏における挨拶語^{あいさつ}で、パトワ語由来の言葉でもある。ただ、筆者は身の回りにレゲエ好きはいないし、自分もレゲエ文化がなんであるかはよく知らない。

苦笑をしながら、握手に応じた。

三宅は、席に着くなり震災直後の自分がとった行動を話し始めた。要約するところだ。

福島での原発事故が起きる前から「反原発」。静岡県・浜岡原発^{はまおか}（中部電力）が危険極まりない地盤の上に建っていることは知っていた。

だから、3・11の地震が起きた瞬間は浜岡を心配した。しかし、異常が起きたのは福島

原発。爆発が起きた。別れた妻との間に小さな娘がいる。急いで離婚した妻に連絡を入れ、妻と娘を連れて友人のいる長野県・大鹿村おおしかに避難をした。その後、「長野でも危ない」と判断すると、知人のツテを渡り歩いて沖縄のド田舎・本部町もとぐに家を借りた。「小学校の入学式がひかえている」と話していた妻は、娘と帰京していったが、

「元々田舎育ち。ここらでカントリーマンに戻るのもありかな」

こう考えて、沖縄に腰を据えることにしたのだという。

2010年には、瀬戸内海の祝島かまなか（山口県）にも行った。ドキュメンタリー映画『ミツバチの羽音と地球の回転』（鎌仲ひとみ監督作品）で、島民が30年余りに渡って対岸の上関原発（中国電力）建設に反対し続けているのを知ったからだ。

ここでやっと音楽の話に及ぶ。三宅は、島から帰るフェリーで書いた「祝島帰り」という曲が、新しいアルバムに入っているのだと話した。この曲で三宅は、上関原発建設計画を「日本のチベット問題なのか」と歌っている。社会／環境問題を告発する向きもあるにはあるが、軽快なリズムと優しいギターの音色は耳なじみがよい。

3・11から1年余りが経過していたこの頃、「音楽で社会にどう向き合うか」というテーマを自らに課したミュージシャンは少なくはない。

たとえば、七尾旅人は「子どもたちだけでも どこか遠く逃がしたい」というフレーズが痛烈な「圈内の歌」を書いている。寺尾紗穂は、「私は知らない」で

「私は知らない 人を守るすべを／私は知らない なんにも知らない／原発の日雇いで 放射能で被曝したおじさんが／虫けらみたいに弱るのを 都会の夜は黙殺する」と歌った。前野健太は、「東京2011」で「いま灯りは消え 若者たちは去り（中略）街なんてどこだっというのに いいはずなのに／この街は キラキラ輝いていて／寂しがり屋のぼくにはぴったりだった」という詞を残してもいる。

ヒップホップ界限なら、ラッパーのK D U B S H I N Eもマイクを握っている。「誰も分かんない燃料の行方 決して語られることない事実」（沈まぬ太陽）

原発に対してストレートなNOを突きつけたものから、間接表現をとったものまで、彼らが楽曲で表現するものは様々だが、その多くはロックやフォーク、ラップなり——それぞれが得意とする音楽フォームのなかで歌われている。

当然だ。ミュージシャンがミュージシャンである本質は、詞曲を書き、演奏をする。そのなかにしかない。デモなどの抗議行動がシュプレヒコールの連呼で完結するのに対し、彼らはあくまで音楽表現というフィルターでろ過し、ひねりを加えようとする。いま現在

起きていることに対する怒りや疑問、違和感という出発点は同じでも、音楽を志向すればするほど、ナマの怒号で終わることはない。三宅の「祝島帰り」もその一つだろう。

もう、政治力があるんだ

取材で三宅は「1 / 470 Party People」という収録曲にも言及した。

耳に残る楽曲だ。それは、単に「いい曲だったから」ではない。

プロテストソングや社会派ソングと呼ばれるものの多くは、歌手が「問題」と向き合い、その上で異議を申し立てるつくりになっている。

しかしこの曲は、リスナーに対して唐突に政治参加を求めている、それが「可能である」とも歌い上げているのだった。どこか異様で、だからこそ印象に残ったのである。詞を一部引用する。

**この国の47都道府県で本気で 具体的な実践を生き始める男や女が
各県に10人ずつで集い その470人で日本は変えられる / 470人の中**

の一人はでかいよ／で 誰が今日その一人になるか だ／タワレコもヴィレバ
ンもない地方都市でお客を1000人集められるオーガナイザー(中略) いつも
のカウンターで世界の平和を祈っているカフェのオーナー(中略) 文化の地方豪
族 ローカルのリーダーたち／この夜集った地元の前衛的なオーディエン
スが1000人いたとして(中略) キャプテンマーク任された彼や彼女を 愛し
どやし 甘え 甘やかし 吐り 吐られ そして 取り巻き 支える 100
人が全国に4万7000人(中略) 彼ら4万7000人の消費動向 ライフ
スタイル 日々の選択と人生のベクトルは 既にクニツクリ マツリゴト そ
のものだ／その4万7000人がその友達に与えているかも知れない／

影響計り知れず 47万人の消費動向 ライフスタイル 日々の選択と人
生のベクトルは 5人の国会議員を生み出すことが出来る

(1 / 470 Party People)

この歌は、三宅と同じライフスタイルを送るリスナーに向けて書かれている。世間的には「ヒッピー」と呼ぶ人もいるだろうが、この言葉には若干の蔑称べっしょうがこめられている気もするので、「エコロジカルな人」、既存のものにとって代わる新たなものを理想とする点で「オルタナティブな人」などの呼び方をする。

つまり何かというと、夏は野外の音楽フェスに行き、食や衣服はナチュラルなものに関心がある。例えば、そういう人々だ。

彼が「仲間」とする人々は、社会的マイノリティであることは間違いない。都市部を歩いていてこういった人々に出会うことはそう多くないからだ。

だが、極端なマイノリティとも呼べないだろう。

夏の野外フェスは、会社の飲み会で「ああ、サマソニでしょ、A課のBさんなんか毎年

行っているみたいだよ」と50代がリアクションを返してくるのはしばしばだし、社によっては「フジロックに行くから有給をとらせてください」と言った若手社員・Cくんに対し、好意的な反応を寄せることが「人として好ましい」態度ととられている節さえある。映画『モテキ』では、「夏にフェスに行く」ことが「リア充」と結びつけられてもいた。

地域密着志向の高い野外フェス（地フェス、ローカルフェス）では、環境や社会貢献系のNPO、NGOのブースが出るのが一般的な事例となっていて、それらは20代〜30代におけるボランテニア熱の高さとゆるやかにつながっている。

食に関しても、現代的な事例が見てとれるだろう。

「顔の見える生産者」から「安全な」食材を買うことは一般化しているし、マクロビオティック（穀物や野菜、海藻などを中心に季節や体調に応じた食生活を心がけること）などの選択をする人もいる。週末農業は団塊だんかいのリタイヤ層だけのものではなく、働き盛りの30代の間でも受容されている。衣服に関しても、減農薬、有機肥料で育てた綿花を使ったオーガニックコットンの付加価値は高い。

これらの事例は、「消費の一形態」「単なる流行」に過ぎない面もあるだろう。だが、単なる流行とは思えないほど、持続的な浸透を続けている面も否定はできない。

また、グローバル経済下の都市部でし烈さを増す競争に背を向け、「田園への回帰」を志向する人は後を絶たない。福島での原発事故はそういった流れを部分的に加速し、現金収入が下がっても生活コストが安く、時間に余裕のあるカントリーライフを求める人たちは増えている。

話を三宅の歌に戻そう。

三宅はこれらの人々に対し、「すでに政治力を持っている」と断言するのだった。

「タワレコもヴィレバンもない」小さな町でも、三宅の演奏に100人、200人の観客が集まる。大手のレコード会社やマネージメント事務所のバックアップを持たない彼のライブがそうであるのは、歌で「文化の地方豪族」と表現するように、地元で影響力をもつ人間が動くから。それを全国的規模で結集したら、「もつと世の中はよくなるんじゃないか。俺たちによって暮らしやすい世の中に行けるはずだ」と、「1/470 Party People」で言わんとしていたのだ。

そんなことを熱心に話す三宅の肌は浅黒い。そして、かなりの頻度で「タメ語」になる口調には粗野なニュアンスも見えてとれる。20代の頃には相当やんちゃもしたのではないかと感じた。

文化の縁でつながって、立ち上げられ

精神科医の齋藤環は、『世界が土曜の夜の夢なら——ヤンキーと精神分析』（角川書店 2012年）でヤンキーの精神的志向を、「気合とアゲアゲのノリさえあれば、まあ何とかなるといふ空疎くうそに前向きな感性」と定義している。

三宅は、意気揚々と妄言もうげんと一蹴されかねない「仮説」をぶち上げる。仮に社会運動も音楽と同じで「ノリ」で何とかなると考えているなら、それは齋藤の言うところの「ヤンキー的」なマインドとも呼べるのではないか。ただ、その一方で、三宅はヤンキーがヤンキーであるために必要な縦の序列を嫌悪している。

前項で自ら語っているように、三宅は相手の年齢や社会的地位に拘かかわらず、「タメ語」で語りかけるし、社会的地位で人間が格づけられることも嫌悪する。それ以上に、彼が貫くオルタナティブなライフスタイルはヤンキーとは相容れない。消費文化から生まれたヤンキーと、消費文化に対抗しようとするオルタナティブを同一視することはできない。

短い原稿。30分も聞けば十分なはずだった取材は1時間に及び、その多くは三宅が一方的に持論を述べる展開となり、筆者は「とらえどころがないな」という印象を持った。

得てして、こういうタイプの人は、同質性の高い日本社会で冷たい視線も浴びる。

「立つ瀬がない」

「居場所がない」

1978年生まれの子は「ロスジェネレーション」であることも、そのパーソナリティに影響を与えているだろう。

ロスジェネレーション取材班『ロスジェネレーション——さまよう2000万人』（朝日新聞社 2007年）によると、ロスジェネレーションの定義とは、「1970年代初頭から1980年代初めにかけて生まれた」世代ということになる。つまり、子どもの頃はバブルだったが、高校や大学を卒業して社会に出てみると戦後最長の経済停滞期が待っていた。就職氷河期の波を真っ先に浴び、2002年以降の「いざなぎ景気越え」と言われる景気回復期以降も「新卒信仰」の強い日本の企業文化のなかで安定的な職に就けにくい。それゆえに「冷や飯世代」「全損世代」「板挟み世代」などと、メディアで様々な形容をされてもきた。

雇用の変化は、この世代の社会観の変化をも促している。

毎日新聞「リアル30s」取材班『リアル30s “生きづらさ”を理解するために』（毎日新聞社2012年）には、こうある。

グローバル化が進み、社会の様相は一変している。労働を生きがいにできた過去の時代と異なり、今は働くことだけでは充足感を得ることが難しい。まじめに働いていても、たとえば米国発のリーマン・ショック（08年）で企業自体がふつとぶ。働いている本人には何の責任もないのに。そこで働くこととは別の充足感を模索すると、はた目には「自分勝手」「努力が足りない」と映る。そして責められる。だが社会は「働けばすべてが得られる」以外のモデルを示せていないから、30sの葛藤はいっそう深まる。

時代の変化に目をつぶり、過去の栄光を忘れられず、若い世代の窮状を想像さえしない先行世代への幻滅、「別の選択をしていたら」とか「今後は選択を間違えられない」という不安感とも緊張感ともいえない感覚——それこそが、30sが抱える「生きづらさ」の正体だと思う。

帰国子女として日本に帰国した三宅は学歴ヒエラルキーのなかで勝ち上がり、就職。現在で言うところの社畜生活をわずかな期間とはいえ、送る。

そのうえで「学歴」「企業」という価値観、規律と対峙するようになった。かつて自分がいた場所への未練はないだろう。それでも、社会の多数派に（くどいほどの）問いかけを続けるのは——そうはいっても、「こんなはずじゃなかった」という社会への幻滅があるからではないか。

三宅の「諦めの悪さ」は——ロスジェネ世代特有の刻印であるようにも思える。「ゆとり」「さとり」と世代が下るごとに「大きな社会」への諦観は確定されていく傾向があるのに、彼らはなぜ諦めきれないのだろうか。

1978年生まれの三宅を例にとるなら、彼が10代から20代頭はサブカルチャーの勢いが目覚ましかった。ファッションやスケボーなども盛り上がる。感度の高い若者の間では洋楽への関心が邦楽をしのぎ、DJ文化も盛り上がった。この頃、CDにフォーマットが切り替わったはずの日本でアナログレコードの輸入量が932万枚と過去最高を記録するなどの現象も起きている（2000年 読売新聞）。

三宅にとって大きかったのは、野外フェスの盛り上がりだろう。社縁、地縁、血縁が薄くなっていくなかで、文化でつながった縁を抛りどころにした人間は少なくなない。

三宅の場合、その縁で地球環境との共生であるとか、なるべく金銭に依拠しない生き方

であるとか、そういった価値観を形成するにいたった。これらがどう成熟していったのかは、後でまた述べる。

立候補の前にある壁は何か

1カ月後、筆者は新しい記事を書くために三宅に再取材のオファーをかけた。夕方、携帯が鳴る。三宅の指定する学芸大学の居酒屋に出かけると、隣に^{かっぶく}恰幅のよい中年男性がいた。スーツ姿。長髪、無精髭の三宅と明らかにミスマッチな男性は「岡田哲扶です」と名乗った。

どういつながりかと首をかしげるよりも早く、三宅は「紹介したかったんだ」と切り出した。岡田哲扶は永田町で働いているという。もらった名刺を見ると、政権与党（当時）の「国民新党」の現役議員（取材時）の名前が書いてあり、公設秘書としての肩書きが印刷されている。

過去、岡田は元参議院議員・喜納昌吉の公設秘書も務めていた。

東京生まれ。日本大学法学部を卒業後、ミュージシャンとして魅せられ、喜納のマナーシメント事務所に就職。そのかたわら、喜納のライブでもエイサーの踊り手（バックダンサー

し)を務めるようになった。

2004年、喜納は参院選に民主党から出る腹積もりを決める。岡田もダンサーから選挙運動員になり、喜納は当選。秘書として6年働く。2010年に喜納が落選した後も「永田町に残りたい」と希望し、いまま政治の世界で働いている。

元来、政治畑の人間ではない。音楽好きが高じて永田町に流れ着いた傍流の秘書は、戦績としては1勝1敗だが、2度に渡る喜納選挙を成功体験として記憶している。喜納は、他の陣営がとることのなかった——駅前や広場などの街宣現場にステージとスピーカーを設営し、歌い、演説をするという、いわば2013年の選挙フェスのプロトタイプとも呼べる手法を実践していた。

総務省・中央選挙管理会から交付された「標旗^{ひょうき}」さえあれば、どこでもライブのような選挙活動ができる。選挙を楽しくやって何が悪い——岡田はそういう考えを持っている。

1カ月前の取材で、三宅が「永田町では」「永田町にいる友だち」などという言い方をしているのが気になっていた。正直に言うなら、筆者はそういった発言を聞き流している。どこか胡散臭^{うさんくさ}かったからだ。

しかし、これは誤りだったと認めなければならぬ。

確かに岡田は永田町で働いていたからだ。三宅はこう言うのだった。

「(自分が)東京に来たときは、定期的に会っているんだ。偉そうにライブで政治のことを喋ってはいるけど、実際どこまで知っているのかっていったら、たいしたことはない。だから、『中』の人からの話は貴重なんだ」

つまり、三宅にとって岡田は「ネタ元」。

この時点では知るよしもなかったが、筆者は参院選が終わった段階で三宅がこう話すのを聞いた。「はつきりとは言われなかったけれど、いまになって感じるのは、岡田さんから立候補をなんとなく打診されていたんだらうな」。つまり、スカウトはこの時点から始まっていた可能性がある。

だが、なぜ岡田は、無名の三宅に白羽しろはの矢やを立てようとしたのだらうか。

三宅よりも知名度や影響力のあるミュージシャン、文化人なら幾らでもいる。

ただし、彼らは背負ったものが大きい。まず、所属事務所やレコード会社との関係がある。仮に選挙に出たなら、本業は遅延、ストップせざるを得ないし、政治忌避きひが蔓延するなかでブランドイメージへの傷がつくことを恐れる人間もいるだらう。それを納得させるのは至難の業で、どれだけ公の場で政治的な言及をしていても、彼らが実際に選挙に打っ

て出るまでの間には高いハードルがある。

けれども、三宅はこの段階で「免疫」を持っていた。

彼自身が述べていたように、三宅は2010年の喜納昌吉・参院選の街頭演説で歌って、喋っている。

「洋平は、2006年に喜納さんがやったライブに犬式で出演していました。その縁で選挙の応援演説を依頼したんです。あの時、他にも様々なミュージシャンに応援の演奏をしてもらえないかと依頼をしました。ほとんど断られましたね。そんななか、洋平はステージに立ってくれたんです」

「選挙の街宣という舞台に出るのは、ミュージシャンにとって難しいもの。必ずしも音楽ファンばかりではないから、普段とはわけが違う。喋りの点もネックになる。曲がりなりにも特定候補者の応援を宣言して出るわけだから、支持している理由も喋らなきゃならない」(ともに岡田)

YouTubeには、喜納の応援に登壇した三宅の記録(2010年7月8日)が残って

いる。長髪、そしてラフなランニング姿。ギターを弾きながら、自身が3年後に立つ渋谷・ハチ公前でこう喋っている。

こんなところで合法的にライブをやっちゃっていいんですか！ここで、ヤッキ蓮舂れんぼつさんの演説とか聞いていたんですけど、ミュージシャンとして言わせてもらうと、ちょっと拡声器のハイ(高音域)が痛いですね。日本の選挙運動は、どうして拡声器がうるさいんでしょう。もうちょっとあのー、音楽とかこういう風によつて、楽しくやりたいですよ。政治を楽しくしないと、日本も楽しくならないと思います。

ぼくは別に、民主党員でも、民主党を表立って応援しているわけではないんですけど、それより何より、喜納昌吉という男を応援しています。その男が、ミュージシャンを代表してと言いますか、唯一信用できる国会議員かなと思っています。これはぼくの意見ですけどね(中略)喜納さん

お願いしますじゃなくって、自分が何をするかだと思っうんですよ。基地も、原発も、あなたの話なんです。これは、日本の話でもなくて、国会の話でもなくて、政党同士が対立項によって争う話でもなくって、僕らの話なんですよ。だから無関心なんてのは、それだけでダメですね。

気負ったところがまるでない。堂々と喋っている。これが岡田のなかで手応えの一つになっいてもおかしくはない。

音楽と政治は似ている

岡田からの打診を薄々感じていたからなのか、それとも取材者が同席していたからか、泡盛を片手に三宅は熱心に語り始めた。

「選挙の前になると、ネットで『投票に行こう』って書き込みが増える。それはわかるし、おれも書いてきた。でもさ、音楽っていうエンターテインメントの分野でずっとやってき

た側からすると、いまの選挙システムはつまらない。音楽でやってきたことを活かして、もっと選挙を面白く、カッコよくできると思うんだ」

地方選から国政選挙まで、投票に至るまでのプロセスを単純にエンターテインメントの文脈で語っていいかは議論の分かれるところだろう。娯楽性だけが重視されれば、熟慮よりも、熱狂が右に左に振れるだけで中身が伴っていない——状況も生まれかねない。そんななか、三宅はさらに持論を述べる。

なぜ、選挙カーやビラはあんなにダサいのか。候補者はなぜパツとしないスーツを着ているのか。そして何よりも、選挙演説を誰も聞いていない。

その点、ミュージシャンは対案を持っている。

自分を例にとるなら、数百から数千人を集める音楽イベントをやってきた。イベントを開くには、選挙と同じようにビラ（音楽文化でいうところの、フライヤー）がいるだろう。カッコいいビジュアルをつくることのできる仲間なら、幾らでも知っている。おっさんぽいビジュアルではなく、音楽好きの若い世代にも届く——くだけたビジュアルをつくることのできる仲間だ。

選挙演説ならシンガーやrapperだって負けていない。候補者が繰り返している「」で

はありませんか！」口調じゃ何も届かない。オーディエンスを沸かせられるかどうかをステージごとに試されてきた人間なら、もつとうまくできる。聴衆をつかむには、声を張り上げればいだけじゃない。歌で食ってきた人間ならそのノウハウを知っているし、とにかく選挙カーの音質はひどい。あんな粗悪なクオリティで大きな音を立てられたら、騒音と感じる人が出てくるのも当然だ。いいサウンドシステム（音響システム）をセッティングできる仲間がいるから、彼らを連れてくればいい――。

持論はまだ続く。

地元の商工会や有力企業、支援組織の集会を回ることを「ドブ板回り」と呼ぶ。

地方を回るミュージシャンはとくにそれをやっている。大きなレコード会社や事務所に所属しない「インディ」のミュージシャンは地元のプロモーターとのつながりを大切にしている。これからもライブができるように、つながりを広げていくことが自分の財産になるからだ。ライブが終われば、どんなに疲れていても同じテーブルで飲み食いをする。そこで、たくさん仲間を見つけてきたし、彼らが地元の若い世代とのネットワークを持っていることも知った。これは、票田じゃないか。

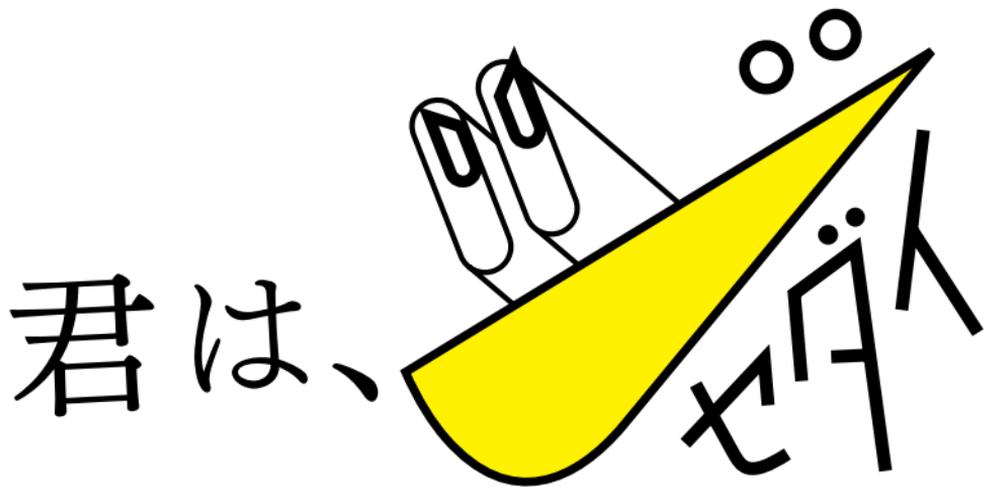
野外の音楽フェスにも数多く出演してきて、そのなかには地域密着を掲げているものも

多い。地域密着は音楽好きだけを向いて話していたら、達成できない。地元の商店や企業、役場にもきちんと話ができないと認めてもらえないだろう。娯楽も何もない地方の小都市でそれをやってきた人間たちを知っている――。

三宅は、歌で「文化の地方豪族」と呼んだ仲間のことを熱っぽく語る。

選挙というリアリティがない状況で聞く仮説は面白いものではあった――取材からの帰り道に、ある小説で読んだ一節が頭をよぎった。

「夢は、夢である間だけ、力を持っている」



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!